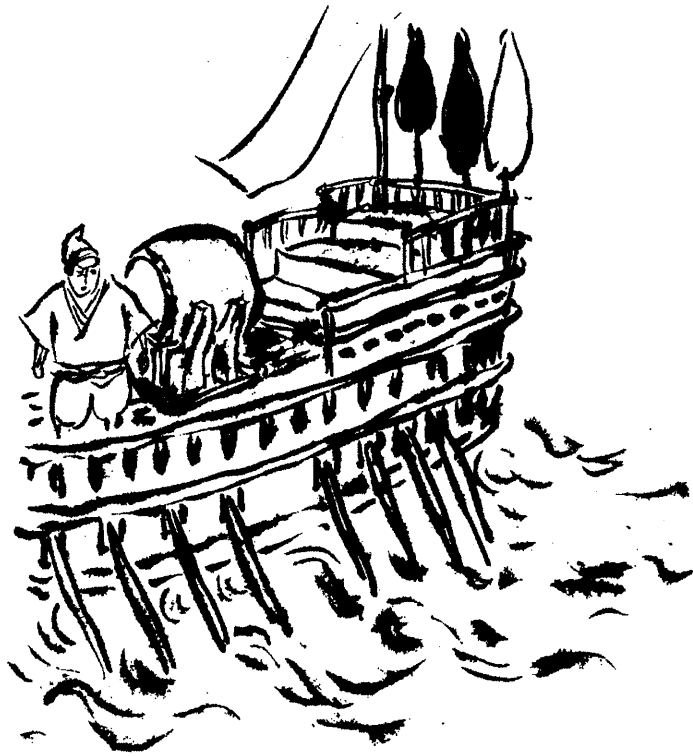


嚴いづく

島しま

参まい

詣り



旅の僧が、安芸国巖島神社を訪れてきたのは、年が明けて暫く経った頃のことであった。都を後に、播磨・備前・備後を経て、西行の托鉢の旅は、既に春を迎えていた。旅の僧の顔を目にした頼信は、思わず目を瞠っていた。

「これは、西行どの…」

思いがけない西行との再会であった。

西行は憔悴しきった顔でいた。

修行僧の行脚の旅は、遅々として足は進まず、都の乱から、はや一ヶ月が過ぎている…と、西行は詫びた。

「都では、景弘が、何かとお世話をかけ、お礼を申し上げます」

「いや、景弘どののご縁、まことに面白きことにて、出家の身を忘れまする」

西行は、景弘が六波羅の平家屋敷に建立した伊都岐島神社について詳しく語った。

「都人は巖島別宮と呼びます…ここには巫女たちの内侍修行の道場があり、今も芙蓉が和歌の道や舞などを教えております」

「おお、芙蓉さまも、息災であったか…懐かしきおなごじゃ。何ともとらえどころのない、不思議なおなごじやつたが…」

「景弘どのの書状を、お預かりしておる」

それを一読した頼信は、目をかっとなき、思わず呻いた。

「源義朝どのが三条の館を…」

焼き討ちに遭った三条殿は、惨憺たる地獄絵図を現出したという。

「みなごろし」

西行の言葉に、頼信は声を呑んだ。

平治の乱が起きた日、清盛は熊野参詣にでかけ、景弘も同道していた。

「熊野信仰」

西方浄土に通じるといふ修験僧の言に、天皇はじめ都の公家や貴族たちが、それを信仰した。

住吉の湊から船で出航した清盛は南紀に向かった。清盛の手勢三十人余り。白浜から熊野古道を行くために馬も船に積んでいた。

熊野坐神社までの険しい山道は、修験者たちの修行場で、山深く踏み込む参詣者の難行は、神仏への禱りなくして到達できぬものであった。

清盛一行は、熊野坐宮から十津川と熊野川沿いに山道を辿り、河口に近い速玉神社へ詣でると、再び船に乗って熊野の海を勝浦まで戻り、那智神社へ参詣した。

「黄泉の国の入り口……」

清盛の一行に、影のように身を隠したまま同行している山伏がいた。芙蓉が山修行していた鞍馬の修行者であった。

後白河天皇は退位して院政を敷き、好きな今様を楽しんでいた。この院政をほしいままにしたのが藤原

通憲みちのりであつた。

後に出家して「信西しんせい入道」。怪物といわれた。

この信西の権勢を苦々しい思いでいたものに関白の藤原信頼のぶよりがいた。

さらに藤原信頼と手を組んで謀反を起こしたのが、「保元ほうげんの乱」の処遇に鬱屈していた源氏の棟梁源義朝とらりょうであつた。

平治元年（一一五九年）十二月九日。

「清盛どこの留守を狙つての信西殺し……」

この都の異変の報せしらせをいち早く通報したのは芙蓉の手の者であつた。

知らせを聞いた清盛の行動は素早かつた。

馬を駆つて都に戻つた清盛は、隙を見て御門みかどと上皇を盗み出すという思い切つた行動に出て、公家くげたちを驚かせていた。

賊軍追討の勅宣を得た清盛は、御門の軍勢として意気が上がった。平家一門をあげての出陣に源氏は敗れ、捕らえられた藤原信頼は命を乞うたが処刑され、義朝は身内の陥穽かんせいに嵌りはま、湯殿で裸のまま討ち果たされていた。

信西は、事の顛末てんまつを清盛に伝えんと逃亡したが、逃げ切れず捉えられていた。

景弘は、この戦いにも騎馬武者の一人として重盛しげもりの配下にいた。

平治の乱は、私怨しえんの争いといえたが、永年の摂関の政にも終止符を打った。

そして結果的に源平合戦となったこの戦に勝利した平家の天下を招いた。

「何の罪もない女子どもまで殺された。この世の地獄……」

話し終えた西行は、一頻ひとしきり念仏を唱え、涙ぐむ頼信に、都から遠く離れた佐伯の地の平安を、「ようござりますなあ……」と、しみじみと告げた。

「自ら俗世を断った西行どのは、邪念なき剣の道を究めようとされておる……」

仏道修行と剣の道は「悟り」を求めた。

刀術は、日本刀づくりと共に、古くから武人の鍛錬修行のために研究されてきていた。

頼信や伊佐いさのような神官が、その刀術者を務めていた。

「頼信どの」

西行は、地御前を去るにあたり、恐らく今生では再びまみえることはあるまいといい、

「この佐伯の地にある北辰ほくしんの刀法を見せてもらえぬか……」

と、懇請した。

頼信は、伊佐に、その形を披露させた。

伊佐は、一尺五寸ばかりの小太刀こたちを手に持って立ち、殆どほとんど力の入らぬ姿勢で、肩に担いだ白刃を神樂の

太鼓た太を叩くように左右に振り下ろしてみせた。

西行は、息を止めて、それを凝視していた。

伊佐は、右足を軽く曲げ、左足の踵かかとを軸にくるくる回転していた。肩に担がれた小太刀こだちは左右のどちらにも自在に振り下ろされた。

小太刀の切っ先は、敵の面上に、あるいは胸元に、そして帯の下あたりに達し、殆ど肉薄ほとんした状態で揮う刃は、敵にとつて防ぎようもなかった。

西行は、杲然ほうぜんとしていた。

「この刀形とうぎようは、八幡神社やはたに伝えられる三刀と申す…」
と、頼信は告げた。

西行は、再び諸国への旅に出ていった。

永暦元年（一一六〇年）初秋。

清盛が、安芸国佐西郡ささいのこおりを訪れ、巖島神社に初めて参詣したのは、平治の乱の翌年であった。この年、清盛は四十三才。

紅葉にはまだ早い時期だったが、清盛の好物の魚介の多くが旬を迎えていた。

「都にはないもの…」

それは、強い潮の香りであった。

清盛にとつて、潮の香りは、伊勢平氏の本拠である伊勢や熊野の海を思い起こさせるもので、噫むせ返る潮の香に清盛は暫しばし浸った。

「息災であったか」

清盛の乗船に、小舟を横付けにして挨拶に赴いた頼信に、清盛は親しく声をかけた。

「清盛さまのご来臨を、予てからお待ち申し上げておりました」

源氏を征して、武士の棟梁となつた清盛は、威風堂々とし、頼信の目にも、どっしりとした重み加わつて見えた。

六月には、正三位に叙せられ、初めて公卿として廷中に列せられた。

平治の乱の戦功による平家一門の恩賞除目では、清盛の播磨守だけでなく、頼盛が尾張守、重盛が伊予守、宗盛が遠江守、教盛が越中守、経盛が伊賀守など、知行国は六ヶ国に増えていた。乱の後、清盛は乱を招いた院と御門の争いから身を引く格好で、その何れにも加担することなく、宮廷の力だけでなく摂関家や公卿の影響力が急激に薄れていく中、その共倒れを傍観した。

しかし、源氏への沙汰は厳しいものがあつた。源義朝に与した源氏の主流はもちろん、その係累にも刑を処し、再び源氏の力が甦らぬよう絶つた。その中で、清盛は、義朝の嫡男の頼朝と嬰兒の牛若丸だけは命を助け、頼朝を伊豆に流した。

清盛は眠れぬ夜を過ごすことがあつた。

清盛は男盛りとはいへ若い頃のような意気盛んな行動や無謀な考えは控えるようになり、しかし、ただ一つの野望は胸の中で燠火のように燃え盛っていた。

「平家の守り神として、西国の海に明かりを灯す明神大社……」

清盛にとって、安芸の厳島は、父から受け継いだ宋との交易に重要な拠点であつた。

それに、高野山でのお告げを受けたこともずっと気にかけていた。

清盛は、景弘の言を容れて、西海の航路に睨みの利く元海賊や警固衆に新たな組織編成を組ませている。「交易船の往来に、支障のない備え……」

それは平家の弥栄と自分の壮図にとって、何より重要な課題だった。

清盛は、今回の西国への船旅に万全を期した。

重盛に言いつけ、景弘と共に西国への船路を辿らせ、不安を取り除く査察をした。

清盛は、百艘もの船団を組んだ。

清盛が乗りこんだ御座舟は、櫓六挺立。先乗り舟は二十六挺立の兵船。先乗りとは船団の前方海上を見張りながら先導する船で、ここには海路に詳しい景弘と小鷲丸が乗り込んでいた。

景弘は、芙蓉に諮り、内侍役である巫女たちを引き連れ、清盛一行に随行させた。

四挺立の番船は洋上警備の軍船。六艘の末漕・枝漕舟は、道中の食料や衣装、道具などを積み、住吉船や摂津の福原船、安芸の阿賀船などの漕ぎ手ら併せて二百挺立の大船団を率いて、清盛一行は住吉の湊から巖島へ向かった。

この船団は、基本的には帆走せず、櫓を漕いで「小早」と呼ばれる櫓舟や「漕ぎ伝馬」と呼ばれる曳き舟が綱で引いて海を渡った。

この時の清盛の船団の形を編み、具申して採用させたのが景弘であった。この船団の編成は、その後の御門や公卿など、あるいは將軍・国主などの渡航船団の原型になった。

清盛に命じられた景弘は、伊予警固衆へ急使を立て瀬戸内の海を安全に渡るための先乗り役を申し入れていた。この航海中、西播磨の潮田の吉衛は、早船で急使を立て、備前はもとより伊予の塩飽や因島の船侍に「安全な航海」のための檄を飛ばしていた。そして住吉の湊を後にした船団には、紀州や熊野、淡路の船乗りも加わっていた。

瀬戸内の警固衆の多くは、漁労者の集団であり、自分たちが漁獲を得る海域を護るために自ら武装した者たちであった。この古代水軍は、瀬戸内海にも多く進出した海人たちであった。

特に安芸国の倉橋・音戸・蒲刈・大崎・安浦・安芸津などの警固集団は、この辺りの島々の狭い水路に詳しく、讃岐の塩飽警固衆と共にその剽悍な戦闘能力は高く、早瀬の潮の干満に対応した素早い動きには、父の忠盛も苦勞していた。

特に「阿賀の漕ぎ伝馬：」と呼ばれる二十挺櫓の快速船は、軍船を曳かせても抜群の能力を示した。後の世に知られる音戸の瀬戸の整備も、この阿賀衆の力によるものであった。

自ら出向いていった景弘は、安芸灘を睨む因島や真鍋島の警固衆の長へも話を通したりした。ここでも景弘の磊落で率直な姿勢が、談合相手に心を開かせていた。

「お前さまには、勝てませぬ：」

また、瀬戸内の警固衆だけでなく、佐伯の山間に群居する野武士にも、清盛の来島を伝え、その警護をせよと過分な報酬をもって備えた。こうしたことの裏には、父の頼信が束ねていた佐伯軍団の長年の統率力があつた。

神主家の神官屋敷は、地御前神社の後背地である小高い丘にあつた。

屋敷内に煌々と明かりを点し、清盛一行に、夜更けまで晩夏の夜を楽しませた。

この日、京の巖島別宮の内侍と同じように、芙蓉の道場で磨き上げた巫女たちは、白拍子姿で勢揃いし、平家一門を悦ばせた。

清盛以下の武将たちには、一人一人選りすぐった巫女を侍らせた。

「ここにも内侍がいたか」

清盛は上機嫌だった。

この時清盛が気に入った内侍がいて、後に御子姫君とよばれる女兒を生んだという。『源平盛衰記』によると母親譲りの美貌で後白河院へ入内したとされている。

この日は、芙蓉と共に久しぶりに国に帰った景弘や小鷲丸も接待役で過ごした。

「寛いでくださりませ」

そういつて客人に、浮渡が差し出したものは、湯上がりに身に纏う薄物の衣服であった。

「この辺りで栽培している楮の紙衣でござります」

極楽寺山や巖島対岸に連なる山の麓には、楮や三桮が多く自生していた。

秋口といっても、まだ日中は気温が高く、夕方には風が潮風も止めた。

「これは、涼しく…まことに重宝」

紙衣は、楮や三桮の繊維をこまかく碎き梳いたもので、柿渋を塗布すれば雨水にも耐えた。律宗の僧が伝えたというが珍しく、神社の御幣などにも使われた。

清盛らの接待の一切を、景弘は、浮渡の父の筑祢つくねに任せて取り仕切らせていた。こうした際の筑祢の力量は際立っていた。

筑祢は、旬の食材を目録に記し、その調理を含めて、見事な采配さくぱいを揮ふるっていた。筑祢は大野おおのの赤人あかひとに手伝わせて、食材を集め、料理人の差配さばいと客の接待の膳部こしら拵こしらえを浮渡に任せていた。

また食材だけでなく、接待に必要な物資は、都でしか入手できないもの以外は、すべて佐西郡の特産物を中心に、近隣の集落の長おさを通じて集めた。

この調達に対しては、通常より多くの報奨が与えられ、土地の人々の意気が大いに上がった。

「佐伯の地は、よきところじゃの…」

清盛は、景弘に、喜色を見せながらそう告げた。

「お前の言うたとおり、まこと、日の当たる明るい土地じゃ…」

地御前の神官屋敷から、目の前に阿品の海が広がって見え、その先に巖島いづみの峻険しゅんけんが一望できた。

「この瀬戸を、遣唐使船も通り過ぎてござりまする…」

「そうか…」

清盛は、何ぶごとか胸むねに燻くゆらせていたか、しばらくの間、目の前の暮れ馴染なじむ海の眺望たうぼうにじつと目を注いだ。

清盛が思わず相好を崩したものに、この辺りの山間で仕留めた猪いのししの肉を、念入りに血抜きし、塩麴しおこうじに漬け込んだものを焙あぶり、大根おろしと柚子醬ゆずひしおで食べるというものがあつた。

鴨あひや山鳥やまどりの焙あぶり肉も、平家一門に、その野生の味を堪能させていた。

「今は、牡蠣には、早い時期でござるが…」

巖島周辺の浜の浅蜷や蛤は、よく肥えて旨みがつまり、また、穴子は彼岸になると体内に脂を蓄え始め、腹の皮膚の色を金色に染めた。

「金穴子とな…」

醬や味噌を塗りつけ、網で焼くと得もいわれぬ香りが立ち、その風味に若い重盛や一門の家人たちは挙って舌鼓を打った。

清盛の好物の小魚の干物も、口の奢った都人に人気があった。春先から秋口まで巖島海域で獲れる小ぶりな鰈が味わいよく、天日に干しあげると旨みが増した。また、大野瀬戸の渡り蟹は、今が旬であった。その旨さは舌の肥えた清盛も絶句するほどだった。

「八幡川の畔で地酒をつくりおる申丸と申す杜氏がおります。近頃、佳き水探り当て、八幡神社や速谷神社のご神酒に献上致しております…」

そう告げたのは、田所の伊佐であった。

「伏見の酒も佳き水を得て、その美味なる口当たりの酔い心地、我らの耳にも入っておりますが、八幡の酒、捨てがたく…」

これは、何ごとも用意周到な伊佐の先を見て手を打った成果であった。伊佐は、申丸にいつけ、奈良の杜氏を佐伯に呼び寄せて酒づくりの手に染めていた。申丸は、酒の濁りを取り除き、上澄みを掬い取って甕に詰めたものを運び込んできていた。

八幡川源流の峪水の如き、美しく澄んだ酒は、酔い心地も桃源へと誘った。

その夜、珍しく清盛が景弘を召して、酒の相手を命じた。

大野瀬戸に、いい月が出ていた。

「久しぶりに国に戻り、今夜は父母と妻子の水入らずであらうな」

景弘は、久しぶりに浮渡との邂逅を果たしていた。七年の間に、嫡男の景信の下に二人の娘が生まれていた。

宴は、まだ続いていた。

賑やかな歌声が、清盛の寝所に当たてた離れまで伝わってきた。

新しい木の香りが匂った。

「いつか、お前と同道した仁和寺の草庵……」

唐突に、そう言い出した清盛に、景弘は、訝しい思いでいた。

「いや。このことは、もつと早くに、お前に告げておくべきじゃった……」

ひどく優しい顔の清盛が、そこにいた。

「お前と北野の前が、嚴島神社建立について心を砕いておることは、わしも承知をしておる……」

芙蓉のことは、いつの頃からか清盛は、六波羅の嚴島別宮に出入りする内侍たちの面倒を看ている者として、承知していた。

鞍馬の幻術によるものかどうか、その後、清盛は芙蓉への無用な好奇心や執着を示すことはなかった。

「わしの前では、おくびにも漏らさぬが、既に十余年になる。この長い年月に、そちは、ずっと嚴島神社造営を思い続けてきた……」

こんな清盛に初めて接したと思った。

「そちは、わしを主君として仕え、よう励んでくれておる。その一心なきことも、わしには判わかつておる……」
この夜、清盛は、八幡の酒の酔いでか、あるいは船旅の疲れのせいか、ひどく感傷の心であられる……と、景弘は思った。

「先の戦乱で無碍むげに奪うた人の命の数々……その崇たかりや、きつとあるべし」

景弘は、返す言葉もなく、ずっと無言でいた。

「それでの。景弘。この巖島神社に法華経の写経を納めることを致こしたいが、どうじゃ……」

翌朝、父の頼信は、清盛の案内役の景弘と共に巖島へ渡る舟の上うへにいた。

一夜明けると、清盛は、昨夜の感傷に暮れた様子から一変して、いつもの華やかで磊落らいらくな武士の棟梁とうりょうの顔に戻っていた。

初秋の風が頬に優しい上天気であった。

「先に、ぐるりと島の周りを……」

清盛の望みで、景弘は、大野の赤人に命じて、舟を島の東に向けて漕こぎ進めていった。

巖島の西対岸に、牛が臥ふせたような格好の独立峰があり、清盛は、その山の名を訊たずねた。

「経小屋山きょうこやさんにござります」

対岸の大野には、土地の漁師たちの苦屋とまやが疎まばらに点在するだけで、温かな気分を抱かせる山裾の傾斜地と鑿のみで削りぬいたような小さな入江が見え、渚なぎさまで迫った柔らかな色の竹林が目立つだけの自然林が清盛

を和ませた。

対岸の北方には、佐伯山さくやまに行基ぎよきゆかりの極楽寺山、野貝原山のがいばらやまに亀ヶ岡山かめがおかやまが並び、幾本かの清流が海に注いでいた。

「亀ヶ岡山と経小屋山に降った雨は、その日のうちに、大野瀬戸へ流れ込みまする」

その清流の豊かな山の恵みを、じかに受けていた大野瀬戸と阿品の海は、豊饒ほうじょうな海の幸が約束されていた。

「経小屋山には、巖島みせん弥山で修行しておる僧や山伏やまがしらの修行場があり、頂上には、律令の頃の物見の跡があり、岩を穿うがつた狼煙台のろしだいもありまする」

「ほう、狼煙台のろしだいとな…」

「何れいずの海から寄せくる外敵に備えて、守りを固める物見…と、素早く知らせる狼煙…」

景弘の言葉に清盛は領うなずき、日を受けた経小屋山を海峡越しに暫しばし眺めた。

清盛は、目の前にした海峡の眺めに重ねて、遙はるか遠い宋まで至る外洋へ思いを馳はせていた。

巖島の周りの海を一巡りした清盛は、西の海上から神社近くの御笠浜に着いた。

浜には小さな鳥居が建っており、潮が満ちると鳥居は浸ひかり、参詣者は船で鳥居を潜かつて詣よでる…と、頼信は清盛に語った。

「ここに、空海上人は、お籠もりであったか」

浜に近づいた舟から清盛は目を凝らしていた。

振り仰ぐ清盛の目に、島の上空に流れる白雲と共に神々が座している弥山の靈峰そびが聳そびえ立っていた。

「この気配：巖かな神慮ならん」

思わず、清盛は呻いた。

浜には雁木の石が積まれ、弥山頂上に真っ直ぐ伸びた参道が続き、浜を見下ろす高台に巖島神社本殿があった。神社の西に峪の流れがあり、そこは数年おきにやってくるあらしの通りみちだと、傍にいた頼信も声を挟んだ。

「先のあらしで、谷は土砂で埋まり申した」

しかし、この社は、神が護り給うてか、神殿は創建以来土砂水を蒙ることなく、ここに神殿を建立した先祖の深い叡智について頼信は控えめに語った。

白木の神殿は、檜皮葺きの屋根も風雨に傷み、参道に続く石垣も崩れが目立った。

「どうとう、清盛さまは、この巖島へとおいでになられたか…」

景弘は、そう胸の内で呟き、思わず涙ぐみそうになっていた。

幼い頃から、父に連れられて日ごと通ってきた巖島神社の古い社に、今、清盛は立っていた。

神殿の階に立った清盛は、そこから見下ろした大野瀬戸の眺めに、しばらく沈黙していた。

「あの経小屋山は、西に当たるか…」

「然り、日輪は、あの麓に沈みまする」

と、景弘は答えた。

「あの辺りが、西方浄土…」

そう清盛が呟いた声を、景弘は聞き逃がしていなかった。